

飛田 雄一（ひだ ゆういち）

四十九歳 男性 神戸市灘区在住

阪急六甲からの長い坂道を息も絶え絶えに登ると、静かな住宅地の中に「神戸青年・学生センター」が見えてくる。震災時に活躍した著名な人なので緊張いっぱいの私たちを、ここにこぎきくな感じでカウント一横の事務室で待つていてくれた。

中学・高校時代はバリバリの機械体操青年やつた。それでも安田講堂のテレビを見ていて、機動隊の方が悪いと思つとつたもない意識を持つとつたんよ。自分は違うが、親はわりと真面目なクリスチヤン。だから人権意識とかは進んでいたんかもしけん。

大学の学部は農業経済。実家が農業だったとか、そんなんじやなくてね。当時としては珍しく、小学校から農学部に行こうと思つて農学部に行つて、行つてから別のこととしどんのやけどね。農学部は農業経済があつたから、たまたま。実習的なこともせんでもいい学科に行つて、朝鮮の本国史、農民運動史みたいな修論を書いて、ちよつと時間がかかつたけど、一応正式に卒業した。

その後は仲間内で研究会をやつとつた。朝鮮本国の農民運動史の論文を何本か書いて、本にして。朝鮮をフィールドに選んだのは、それは大学が一九六九年入学やら。一番華やかな、最後の全共闘でしょ。セクトには入らなかつたけど、神戸の「ベ平連」とかしどつて、神戸の「ベ平連」はわりと在日朝鮮のことによくやつてた。そやから、ベトナム反戦運動もしてたけども、差別の問題とか在日朝鮮人問題とか、六九年、七〇年ぐらいまでわりと一生懸命取り組んだ。

その後は「むくげの会」といつて朝鮮問題の研究サークルみたいなを作つて、それが七一年。在日の裁判とかをしどたんですよ。「むくげの会」を作つたメンバーは、だいたい今も半分位おるわけよ。当時の僕と同じ時代の人らはまだ五、六人おりますよ。まだそのサークルは続いている。文化サークルとしては珍しいんですね、二十七年間続いて、二か月に一回雑誌を出して、合本も全部揃うてるというから。

で週に三回くらいアルバイトしつた。ここはね、僕が大学生の途中に、一九七二年にでききた。メインの事業として環境、朝鮮キリスト教会のセミナーをしとるから、朝鮮関係は最初からブレーンみたいに参加して、かなり入り浸つとった。そこで、ここに就職しようと思つて話しつけとつたわけ。朝鮮史関係でつける職場なんて、僕らの年はそんなにないです、大学の研究職以外にはね。朝鮮史セミナーをするというよりも、ここはなんせ市民運動の一大拠点やから。大学院の一年生の頃かな、アルバイトが一人辞めて、卒業と同時に正式な職員になる約束を取つて、卒業後に入つた。ここが留学生センターとして有名になつたのは地震の後。それまでは、留学生はよく出入りしとつたんやけど、留学生支援活動は別にしてなかつた。それでも地震の難所にして、最初は「三日泊めて新しい所を探して出て行つてもらうことにして」と、あと留学生が逃げ込んできたし、それで避難所にして、次が見つからへんから結構な数がおつた。だから地震のあとはそういう留学生の避難所や宿泊先を世話したり。

それから四千万円ぐらいお金を集めた。学生センターに全壊か半壊の証明書を持って来たらその場で三万円渡した。それで最終的に二千三百万円渡した。それが、當時有名だった。行政なんかそう簡単に渡せへんでしょ、学生証持つて被災証明書を持って来たら渡した。

早々とここに逃げ込んできた留学生が「一日でも早い三万円がめちやめちや価値がある」と言うたんが始まり。それでウチは金が集まらん時から渡した。一月一日から払い始めた時は一日三十人くらいやから一日百万円ぐらいずつ、最初は赤字やつたけど、なんとかなるだろうと渡したわけ。最終的に募金も集まつてやね。それで余つたから、のべ千三百か千四百人の、ここで宿泊した人の費用ももらつてね、それでもお金が残つたから留学生のための「六甲奨学金」を始めた。千三百万円残つたから毎年百万円くずしたら十三年間できるだろうと。

ボランティアとはいろいろつきあつた。ここに泊めてたから。ボランティアは拠点がなかつたでしょ、当時はここは大忙しで、その時は何でもした。環境問題をしどつた

から冷蔵庫をほかすのも忍びないのでフロンの回収したり。

この場所は、留学生が泊まつていたから留学生のまさに情報センターになつた。ロビーもそん時は供給所だつたわけ。その時は留学生中心とか環境中心にわれわれもボランティアに専念しとつた。

実は、それまで私にはボランティアという位置づけはなかつたわけ。最近僕は市民運動活動家に「これこそボランティア」と言つてゐるんだけどね。そういう記録を作る活動とか南京大虐殺がどうのこうのとか動いてゐる仲間もおるわけやけど、普通はそういう人には、ボランティアというイメージはなかつた。市民活動とか市民運動とかいう言葉とボランティアとは無縁だった。ボランティアというのは介護とか社会福祉的な意味でのことやと。

そういう意味であれば阪神淡路大震災はそういうボランティアの考え方をゴッチャにしたと思う。地震を機会にわれわれの間にボランティアという言葉が概念的に広がつた。お茶を運んだりするのもボランティアだけど、市民活動のために葉書を印刷したりするのもボランティア。ボラン

ティアは人助け介護の専売特許ではないから、そういう意味でちょっと概念を広げて取つた方がええんだと思つてゐる。

震災以前はボランティアいう言葉使つたことなかつたけれど、最近やつたら、人手が要るときには「〇〇ボランティア募集」というて集めたり、そういうのはよくするようになりました。けど内容的にはね、ボランティア意識は、あまりないなあ。

そやから例えばこの有機農業関係の消費者グループなんて、会員が三百五十とか四百で事務局員だけで三十人おるやろ。その人たちが週一回出入りしとるわけや。その人に「ボランティアしてますか、あなたはボランティアですか?」と言つたらうつと詰まるやろね、それで「ボランティアでしてますか?」と言うたらね、「はい、そうです」と言うだろうけどね。そういうことはあると思うね、そういうちょっとした温度差がある。

市民運動家は誰かのためにするというより、自分のためにする意識が一方である。それは、世の中そのものが悪いから、それを変えるんだ、そういう認識・制度を変えるんだというふうに一般的に考へるわけ

作風というのは、結局どういうスタンスで、どういうやり方で運動をするかです。だから僕の作風というのは、すべきことはせなあかんと認識して、そのために一生懸命やりましょと。だから、自分はこんだけ一生懸命やつているのにとか、人の悪口言うてもしやあない。何が僕をこうさせるのかというなら、「これはあかんことや」というような普遍的な人権意識がわりと鋭いんですよ。

世の中ひどいことがなんぼもあるけど

ど、私は限定的に関わるようにしている。そういう意味ではそれなりに自主規制しているわけ。自分が十ある力出したらね、時間と金をどのくらい投入できるかといふたら、だいたい、外国人のこういう関係のこととかしかできない。職業柄、新しいことが次から次と飛び込んで来るから。発想としては現代と未来を考える。総括がなかつてもええじやないかとまで思つていいけどね。世に残す記録としての総括は必要だけど、五十点か六十点かを考へることは意味がないかもわからへん。失敗しても深刻なことない。もともと、負けるような裁判をして負けたというような感じやし。

それぞれの運動でゴチャゴチャなったり、そら大変ですよ。でも、概して運動の本筋以外のことで消耗するわけ。そんななかつたら、もうちよこつと進む。それで失敗とか、限界も最初からわりと知っているから、できることをするという感じやね。自分に何ができるかということを考えたら、対象は限られてくる。わりと実利主義、功利主義なわけですよ。

一九九九年十月二日

神戸市灘区内の神戸青年・学生センター

にて

聞き手 高橋広旭、小島和史、佐藤正弘